

KCI 設立 40 周年記念インタビュー

文化を創る (第 2 回) ——未来は根源に

小池一子

十和田市現代美術館館長、京都服飾文化研究財団評議員

KCI's 40th-anniversary Interviews (2)

Kazuko KOIKE

Councilor, The Kyoto Costume Institute and Director, Towada Art Center

Celebrating the 40th anniversary of its foundation, in 2018 the Kyoto Costume Institute (KCI) is interviewing various people who have played a part in its history. In this second installment of the interview series, KCI interviewed Ms. Kazuko Koike, whose dedication led to the "Inventive Clothes 1909–1939" exhibition held in Japan in 1975, which was the first milestone on the way leading to the establishment of KCI. She is currently on the Board of Councilors of the institute.

After her university graduation, Ms. Koike started to work as an editor and made the acquaintance of leading editors and artists of that time. In 1973, she visited New York with a group that included fashion designer Issey Miyake. In New York, they saw an exhibition entitled Inventive Clothes 1909–1939 at the Metropolitan Museum of Art. After coming home, Mr. Miyake contacted Mr. Koichi Tsukamoto of the Kyoto Chamber of Commerce and Industry (KCCI), to suggest inviting the Inventive Clothes exhibition to Kyoto. The National Museum of Modern Art, Kyoto, volunteered to be its venue. Thanks to the great efforts led by the KCCI, the exhibition was held in 1975 in Kyoto. Ms. Koike participated in organizing this exhibition, as well as the Evolution of Fashion 1835–1895 exhibition held in 1980. In 1982, Ms. Koike started to issue a fashion research magazine, *Dresstudy*. "The people who were engaged in those projects were enthusiastic about creation," Ms. Koike recalls. "They were seriously attempting to engage themselves in each project as profoundly as possible."

Subsequently her professional interest broadened to include not only fashion but also other fields such as art and design, and she started to teach at Musashino Art University, Tokyo. As a university instructor, Ms. Koike tried to develop "designers who think" — not designers who can do only one thing, but those who can propose something from a comprehensive perspective.

Concerning the future of the KCI, Ms. Koike hopes that the institute can organize an exhibition based on a fundamental theme, thereby reviewing its origin. "Each exhibition manifests the age it is held,"

says Mr. Koike. "While merchandise is oversupplied today, a project that addresses the profound issues concerning clothes would be necessary. In this respect, the KCI would need to be more sensitive to various, newly emerging things."

KCI は今年（2018 年）で設立 40 周年を迎えました。『Fashion Talks...』ではそれを記念し、過去を振り返るとともに未来を見据えるため、これまで財団に貢献くださった方々を中心に、前号より連続企画としてインタビューを実施しています。第 2 回は KCI 設立のきっかけとなった 1975 年の『現代衣服の源流展』よりご尽力いただき、現在、財団の評議員を務めていただいている小池一子さんにお話を伺います。

出会い

小池: 自分史として振り返ってみますと、私は学生の時から編集やデザインというものに興味がありました。ただ、大きな会社に就職して限られた仕事をするのではなく、色々挑戦してみたいという気持ちがありました。1960 年代にアド (AD) センター社長の鳥居達也さんとアートディレクターの堀内誠一さんに出会い、『週刊平凡』の「ウィークリー・ファッション」というページの制作に携わりました。そこでは彗星のように現れたフォトグラファーの立木義浩さんや、デザイナーの花井幸子さんなど素晴らしい方々がいらっしゃって毎回まじり堀内さんがイメージ・スケッチを描く。すると服はこれにしよう、写真はこう撮ろうという話をして、それに文章を付けていく……。それが毎週なので本当に大変でしたが、おかげでファッションを言葉にすることが身に付きました。アドセンターは本当に面白い会社で、この時、私は久保田宣伝研究所（現在：株式会社宣伝会議）の夜学にも通っていたのですが、その費用も会社が払ってくれましたね。

その後、友人と小さな会社を立ち上げ、コピーライターなどの仕事を請け負いました。依頼は工業製品から銀行まで幅広くあったのですが、結局、繊維関係だけに絞りました。旭化成では海外情報を読みこなして指針を提案したり、印刷物の編集をしていました。また、その頃にお会いしたのがアートディレクターの江島任さんでした。江島さんは『装苑』『ミセス』などを育てられたとても厳しい人でしたが、物凄く鍛えられましたね。ある時私と江島さんが、文化出版の今井田勲さんから「赤坂の料亭に会わせたい人がいるから来なさい」と呼ばれて行ってみると、森英恵さんがいらっしゃいました。森さんが「WWD みたいな新聞

を作りたい」、「2人に任せたい」と仰って、それで1966年に誕生したのが『流行通信』です。

また、1964年の東京オリンピックの際に日本政府が海外渡航の自由化を認め、各国選手団の復路便を利用した初めての海外ツアーが実施され、私もヨーロッパに行く機会を得ました。この頃パリは大きな転換期を迎えていて、オートクチュールに対するプレタポルテの台頭を目の当たりにしました。いわばサブカルチャーの台頭ですね。『ジャルダン・デ・モード』の編集長で、デザイナーやスタイリストの集団「マフィア」を率いていたマイメ・アルノダンがプレタポルテを積極的に取り上げていましたし、プランタンではプリズニックというお店を作って、安くて誰でも着られる既製服の販売を始めていました。こうした流れの中で、何より高田賢三さんと三宅一生さんなど日本の若いファッション・デザイナーの登場が私を一番触発してくれました。一方、日本ではまだ洋裁が盛んでした。昔の和裁がそうであったように家庭の女性たちが学校等で作り方を習って、家庭で縫うというものです。私は何かこれは今後は変わってくるんじゃないかと思っていたので、ヨーロッパのファッション産業の構造的変化を目にして、まさにこれからの衣服作りの方向を確信しました。

思い返してみると、あの時代はやはり皆自分たち、とくに若い人たちの「こうしたい」という意志や「こうあったらいいな」という願望が強くあったように思います。それが全体的なムーブメントとなって、時代を動かしていきました。誰々がこういう仕事を手掛けたということがすぐに伝わりますし、人と人とのつながりがはっきりみえていました。逆に言うと、才能といえますか、25歳で何にもしていない人にはもう興味がないというくらいに厳しかったようにも思います。それは単なる情報というよりも、ヒューマン・インフォメーションですね。

『現代衣服の源流展』と KCI の揺籃期

KCI : KCI は 1978 年に創設されましたが、そのきっかけとなったのは、3 年前の 75 年に開催された『現代衣服の源流展』でした。この展覧会から KCI が設立されるまでの経緯についてお聞かせください。

小池 : 73 年の冬に、学生からの友人である三宅一生さんと皆川魔鬼子さんの 3 人で、カリフォルニアに行きました。でも、三宅さんはすぐにニューヨークに行ってしまうので「ものすごく面白い展覧会をやっているから、すぐにニューヨークに飛んで来て下さい」、という電話です。それがメトロポリタン美術館で開催されていた『The 10's, the 20's, the 30's: inventive clothes 1909-1939』展でした。その後、三宅さんがちょうど京都商工会議所の副会長になられたばかりの塚本幸一さんに連絡をとって、帰国後すぐに京都に行くことになりました。塚本さんはかつての京都の着物産業の隆盛を、ファッション産業としてもう一度

輝かせたいという強い思いをお持ちでした。商工会議所の中にファッション産業委員会が設置され、すぐに展覧会誘致に関する予算措置が決まりました。また当時の京都国立近代美術館館長の河北倫明さんと学芸主任の福永重樹さんも、日本の国立美術館での初となる衣服展の開催ということを大変面白がってくれて、開催館となることがすぐに決まりました。それが75年の『現代衣服の源流展』(以下『源流展』)ですね。おそらくこれは日本で初めて、地域の経済機構がスポンサーとなり開催した展覧会ではないでしょうか。

このとき塚本さんは、海外の美術館をリサーチするなかで、ファッションの美術館を日本でも作れることを確信されたと思うんですね。メトロポリタン美術館のコスチューム・インスティテュートの成立過程について一番勉強なさっていました。まずは財団を作って衣服のコレクションを始めて、ゆくゆくは美術館を建てるという構想を固めておられました。そして78年に誕生したのがKCIです。今でこそ、企業のいわゆるメセナ事業は数多くあると思いますが、塚本さんは本当に早い時期から、文化や芸術への支援活動をミッションに掲げていました。財団の名前に企業名を入れないということは、それがたんなる会社のPR事業ではなく、もっと人間全体の文化のために何か寄与したいという大きな構想だったと思います。

私自身は国立の美術館で開催した大きな展覧会では、『源流展』と設立後の『浪漫衣裳展』(1980年、以下『浪漫展』)に携わりました。そのなかで大変重要だと感じたことは展覧会をいかに視覚的に魅せるかということです。メトロポリタン美術館コスチューム・インスティテュートのコンサルタントで、『ハーパス・バザー』や『ヴォーグ』の編集長でもあったダイアナ・ヴリーランドさんに私たちが傾倒したのは、彼女が衣服を過去のものとしてではなく、現在に生きたものとして展示を行っていたからでした。また見せるということは着せ付けだけではなく、会場やカタログのデザインからチケットまで細部に至る計算です。たとえば、階段のスロープを赤いじゅうたんと生花のカーネーションで埋め尽くしたりしましたね。メンテナンスだけでも大変でしたが、ある種のバブルに向かっていく上昇期の経済力が可能にしたのでしょね。

このような今となっては楽屋話でもあるのですが、やはり展覧会作りにとって重要だったのは、最初の話とも関係しますが、周りを見渡してみても「この人と仕事がしたい」という緊張のネットワークがあったことだと思います。『源流展』ではアートディレクターが田中一光さん、展示デザインは無印良品でも一緒に仕事をしたスーパーポテトの杉本貴志さん、イラストレーションは山口はるみさん、マネキンが七彩の向井良吉さん。また、『浪漫展』ではデザインが浅葉克己さん、写真は広川泰士さんなどが担当してくれました。現在考えると本当に贅沢なメンバーですね。

みなさん、モノを作ることに熱心が本当に凄かったですね。たとえば、田中さんが本当にすごいと思うのは、『源流展』のカタログはピンクのクロス貼りにゴールドのエンボ

ス加工を施した大変贅沢なものです。実はスキヤパレリのショッキングピンクを特別に染めたクロス貼りなんです。展覧会には様々な服や写真があって、どれが表紙になってもいいわけですね。でも、そのなかで「これを見て欲しい」という学芸と編集の方針を見事に引き出している。『浪漫展』のカタログでも、広川さんの写真と浅葉さんのデザインによって、まるでひとつの物語のように感じさせてくれます。みなさん、その分、厳しかったですね。でも、有名無名は関係なく、どれぐらい仕事で深く付き合えるのかということが重要だと思います。結果は後になって付いてきますから。こうして KCI の基礎を固めることができました。ただ、このような仕事への取り組み方自体、1990 年代頃から、日本社会全体のなかで大きく変わったのかもしれませんが……。

一方で、82 年には財団の研究誌『DRESSTUDY』も創刊しました。これは当時としてはとても珍しいものだったと思います。服装やファッションに関しては産業やマーケティングの問題で、ほとんど研究の対象ではありませんでしたから。でも、これからは絶対に調査と研究が重要になる、という思いから発刊に至りました。表紙は広川さんが毎号撮りおろして下さいました。研究誌は 2015 年に『Fashion Talks…』(本誌) へとリニューアルしましたが、これからもメンバー皆さんの研究活動の場であるとともに、是非衣服領域の重要性と面白さを発信して欲しいと思います。

大学での教育

KCI: その後小池さんは、87 年に武蔵野美術大学造形学部の教授に就任されましたが、その経緯と大学での具体的な教育についてお聞かせください。

小池: 『浪漫展』後、ラフォーレミュージアム原宿などで開催した『アンダーカバー・ストーリー展』(82-3 年) や、スパイラル・ホールでの『フォルチュニイ展』(85 年) にも関わりました。けれども、私自身としてはファッションあるいは衣服だけというよりも、アートやデザインといったより広い領域から考えたいと以前から思っていました。そんなとき、武蔵野美術大学の教授であった先程の向井さんと、学長の水尾比呂志さんから就任の打診がありました。「この仕事は様々な分野の展覧会やインスタレーションを企画して、最後の実施に至るまで色々なことが求められます。こうしたクリエイティブなディレクションができる人を育てたいから是非来てください」、という大変嬉しいお声がけをいただき、お引き受けすることとなりました。

大学ではやはり「考えるデザイナー」の養成を目標としました。何か単純にひとつだけのことをできる人ではなく、人間と環境や時代との関係のような全体を見渡せた上で、何かを提案できる人になってもらいたいと思いました。そのためにはまず教育カリキュラムが重要ですね。その点に一番力を注ぎました。だから、授業では単にテクニカルなことについて

勉強するだけではなく、たとえば午前中は座学を中心にして、あらゆる分野の歴史や社会を学ぶという方針にしました。また、私はこれまでの経験からネットワークやチームワークの重要性を感じていたので、1年生からそれぞれの班に分かれて、半年程かけて展覧会を作るという授業を設けました。そこでは企画はもちろん、展示デザインや広報まで、すべてを網羅しています。結果として、決して派手ではないですが、とても良い仕事をしている人たちが出てきてくれたように思います。

ただ、18年程教えていて、やはりだんだんと学生の命の勢いというか、エネルギーが減っているように感じましたね。4月に新入生と会って、最初の課題を提出してもらおうと、なんでこんなに元気がないんだろうと思うことが年々多くなりました。もう世の中が豊かになっているから、欲望が生まれてこないのかな、と。現在はあまり努力しないでも、ある程度のモノが何でもできてしまいますからね。素材でも東急ハンズに行けば、それでいいということになる。だから、自分から縄をなつて作るように導きましたし、私はそういう作品を評価しましたね。そうでないと将来、素材開発なんかできないですからね。一方で、業界はやはり即戦力が欲しいんですよ。即戦力を育てないから駄目だって言われたこともありましたね。だから、学生のみなさんは苦労したかもしれません。でも、ある時、芸術・美術関係の大学が集まるシンポジウムで講演したときに、少し自信をなくしていたときだったのですが、講演後に「絶対大丈夫ですよ。会社に入ったら特定のプロダクトのデザイン画をマスターさせますから、考えて構築する力を育ててください。」と仰った企業デザイナーの方がいて、とても嬉しかったですね。

未来への課題

KCI: KCIは2015年から新しい体制となり、2019年に初めての展覧会開催を予定しています。そこで40周年を迎えた今、将来のKCIの課題についてお聞かせください。

小池: 先日、ロサンゼルス現代美術館(MOCA)で人新世(Anthropocene)に関する大変興味深い展覧会をみました(「Adrián Villar Rojas: The Theater of Disappearance」2017.10.22-2018.3.13)。それは地質学的な観点から、人類が誕生して以降、地球環境に対して行っていることを考えるという主旨のものでした。あるコーナーにそれを地層にして展示するというインスタレーションがありました。それは現在の人間の痕跡が残るとしたら、地球に対して大変な汚染を行ってることが一目で分かると同時に、言葉を選ぶのが難しいですが、大変美しい展示でもありました。文化人類学的かもしれませんが、私としては何か人間の根源的な問題に興味がありますね。また、KCIは40年を経て、18世紀以降を中心とした西洋と日本の衣装の、ある程度のコレクションが形成され、展覧会の企画／開催／展示においてもひとつの型のようなものができたように思います。だから私としては、KCI自身が原点に立ち返るという意味も含

めて、ファッションの展覧会だけれども、何か根源的なテーマの展覧会を見せて欲しいなと思っています。KCIの未来は根源にあるように思うのです。

KCI: 私たちとしては、ファッションの展覧会が歴史的な展示やデザイナーの個展が多いなかで、「着る人」というのをテーマに展覧会ができないかということに現在考えています。

小池: なるほど、それは人間はなぜ衣服を着るのか、という問いへとつながりますね。是非やってほしいです。何でもある時代だからこそ、今まさに、逆に衣服の問題を考えざるをえなくなっていると思います。それを待っている人は多いと思いますね。またできれば、展覧会では学者やアーティストなど、様々な分野の人たちを巻き込んで欲しいです。これまでお話ししたように、その時代その時代で新しいクリエイションが出てきていますから。ファッションに限らず、様々な新しい仕事にアンテナを張ってください。やはり展覧会はひとつの時代のマニフェストでもありますしね。

KCI: 最後は大きな励ましとともに大きな宿題を頂いたように思います。本日はありがとうございました。

(聞き手：石関亮・小形道正)

[図版]

- Fig. 1 『現代衣服の源流展』記念図書(表紙) アートディレクション：田中一光 イラストレーション：山口はるみ 発行：京都商工会議所 1975年
- Figs. 2 「浪漫衣裳展」 京都国立近代美術館 上から：美術館外観、エントランス、展示風景 展示デザイン：石岡怜子 1980年 撮影：広川泰士
- Fig. 3 『DRESSTUDY』創刊号 発行：京都服飾文化研究財団 1982年
- Figs. 4 「布に魔術をかけたヴェネスの巨人——フォルチュニイ展」 スパイラルホール 展示デザイン：内田繁 1985年 撮影：林雅之

小池一子

1936年、東京都生まれ。早稲田大学文学部卒業。クリエイティブ・ディレクター。十和田市現代美術館館長。武蔵野美術大学名誉教授、京都服飾文化研究財団評議員。主な編著作に『素手時然』(原研哉共編、2015年、良品計画)、『イッセイさんはどこから来たの? 三宅一生の人と仕事』(2017年、HeHe)など。主な企画展覧会は「日本のライフスタイル50年——生活とファッションの出会いから展」(1998-9年、宇都宮美術館ほか)、「少女都市」(2000年、第7回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館)など。

(※肩書は掲載時のものです)